

# サピアの『言語』 (Sapir, E. *Language: An Introduction to the Study of Speech*, 1921) と記号論

—Preface を中心に—

三輪 伸春

## A Semiological Analysis of Sapir's *Language: An Introduction to the Study of Speech* (1921)—With Special Reference to the Preface—

MIWA, Nobuharu

### Abstract

Although Sapir's *Language: An Introduction to the Study of Speech* (1921) is fast approaching one hundred years in print it is still appreciated all over the world as one of the excellent manuals for students of linguistics. But, though it is written in an easy style of English, it is not so easy a book as an introductory manual, for several reasons. First, it is said to be a handy manual for the study of American descriptive linguistics but Sapir's covert aim is to criticize the traditional view and method of nineteenth century Indo-European comparative linguistics. Sapir's strict criticism in *Language* is expounded in all the chapters. In order to understand Sapir's criticism, comprehensive knowledge of Indo-European comparative linguistics is indispensable. Secondly, *Language* is written by basic spoken words in daily life with Sapir avoiding the so called unfamiliar technical terms of linguistics. But this is, paradoxically enough, the very reason why *Language* is difficult to read and digest what Sapir intended to say. Thirdly, nineteenth century comparative linguistics was exclusively devoted to Indo-European languages, but Sapir takes into consideration all languages, including non-literate African, Asian and South-American languages besides Indo-European languages.

Sapir's remarkably noticeable view is characterized by the double-leveled structure of language and culture: surface level and deep-psyche level (implying "unconscious") i.e. semiological (semiotic) view, which is stated in chapters 10 and 11 in full detail, but no-one has ever pointed out accurately that Sapir first wrote these two chapters to develop semiology (semiotics), a completely new approach to twentieth century linguistics. And the preface is a deliberately planned summary of all the chapters of *Language*.

**Keywords :** double-layered structure, drift, borrowing, semiology, poetics

### 要旨

サピアの『言語』 (*Language: An Introduction to the Study of Speech*, 1921) は出版以来100年を経過しているが言語学の名著としての評価は依然として高い。しかし、実は名著と称されているわりには理解されていない。理解されていない理由のひとつは原書の内容がいわれるほどにはやさしくなく、

---

1 サピアの *Language* (『言語』) はきわめて難解である。本稿はサピア読解へのひとつの方向性を示すことしかできない。サピアの著作のすべてを閲覧することは困難である。本稿では、必要な場合以外は、サピアの一般向け著作であり唯一のまとまった単行本である *Language* (『言語』) だけを取りあげた。

サピアの主旨が理解されていない。日本語にも訳されているがその訳文は晦渋である。多数ある解説書、関連記事もわかりやすいとはいえない。本稿は、サピアの『言語』のわかりにくさを明らかにする。わかりにくさの第1の原因は、本書は歴史言語学（印欧比較言語学）の批判であることが見逃されていることにある。19世紀以来、歴史言語学といえば印欧比較言語学とされてきたが、印欧比較言語学はヨーロッパの諸言語とサンスクリットとその周辺のいくつかの言語しか研究の対象にしていない。文字言語しか研究対象にしていない。アジア、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアなどの無文字言語は対象から外されている。したがって、人類のすべての言語を対象にしているわけではない。サピアは世界中のすべての言語を対象に入れ、共時言語学と通時言語学を統合した言語学の構築をめざしたのである。しかも、現在の文化記号論、詩学をも視野に入れた時代に先駆けた内容になっている。

サピアの『言語』は徹底した印欧比較言語学の批判と、言語は「2層構造」をなすという主張で書かれている。サピアの主張の根幹は『言語』のきわめつきの名文である「はじめに“Preface”」に凝縮されている。本稿はサピアの『言語』の「はじめに」を本文との対応で読み解いてサピアの言語思想の本質をあきらかにする。そして、時代を先取りして「詩学」と「記号論」が言語研究の新しい視点として取り入れられていることにも注意を喚起する。

キーワード：2層構造、駆流、借用、記号論、詩学

## §1. サピアの『言語』に関する「解説」と「訳者解説」

サピアの『言語』は1921年の出版であるからまもなく出版されてから100年になる。出版以来「名著」といわれ言語学の古典のひとつに数えられ、言語学の入門書としてもいまだによく読まれている。しかし、よく読まれているということはよく理解されているということにはならない。サピアの『言語』は読みやすそうに感じられるが実は大変にむずかしい書物である。言語学の専門書であるが、日常基本語を用いているので字面からみると簡単そうに思われるが実は、その意味するところはきわめて奥が深く、視野は広い。特に注目すべき点は、サピアが、言語のどの分野にもわかりやすい表層の現象と、潜在していて気づきにくい深層の現象があり言語はいつでもどこでも2層構造をなしていると主張していることである。

サピアは、19世紀以来の印欧比較言語学は言語の表層面しか考察しておらず、言語の深層への考察が欠如しているときびしく批判している。したがって、サピアを理解するには印欧比較言語学の知識が必要である。アメリカ構造言語学誕生に関連する書とみなされているが実は、当時隆盛をきわめていた印欧比較言語学批判の書である。

これまでに、国内外でサピアの『言語』に言及した論述は数え切れないほどある。しかし、手元の言語学、英語学、英文法辞典類の解説を読んでも明解な解説がない。『月刊言語』1979年2月号の「特集・サピアの言語論」にはサピアの言語論全体に関する論考が2編掲載されている<sup>2</sup>。しかし、いずれの論考も執筆者独自の見解を述べたものでサピアの『言語』の全体像を

2 渡部昇一「サピアの現代的意義」、泉井久之助「サピアの『言語』」。海外でも、特に、L. Bloomfieldによるサピアの *Language* の書評からブルームフィールドはサピアをまったく理解していなかったことがはっきりと読み取れる（*The Classical Weekly* 15.142-43, 13 March 1922, rept. *E. Sapir: Appraisals of his Life and Work*, ed. by K. Koerner, 1984, J. Benjamins）。三輪『英語史への試み』1988, pp.71f., こびあん書房。

読者向けに具体的にわかりやすく解説した記事ではない。特に、筆者の目の届いた範囲ではどの論述を点検しても「『まえがき』と第10章、11章は記号論・詩学誕生の宣言である」と明確に記した説明、解説はないようである。

過去3種の日本語訳は晦渋である。その原因は、『言語』(の原書)が言語学の専門書であるにもかかわらずキーワードに限らず文章全体が専門用語ではなく日常基本単語が用いられている。それに応じて日本語訳も字面がやさしくみえる日常基本語彙の訳語が用いられている。そのために親しみやすく感じられる。が、実は、サピアの遠大な意図はそのやさしくみえる用語の背後に隠されているので読み取ることは簡単ではない。

過去3種類の日本語訳の解説もわかりやすい説明とはいえない。

サピアの *Language* 全編を通しての「すべての言語現象には表層と深層の2層がある。換言すれば、言語現象は従来なされてきたような研究では表面的すぎる。言語を研究するにはもっと深層(「無意識」)にまで深く、広い視野を持たねばならない」という主張は理解されていない。

泉井久之助の「ソシュールの「講義」に見られる分析は、始め、私にとって特に訴える新しいものはなかった。それは言語そのもののすべてよりも、むしろ言語学的研究の一面を説くものであって、全体において、むしろ文法的技術のための有用な学理とすべきものであるかと思われた」(「訳者のことば」pp. IV-V)という説明は具体的にはソシュールの『講義』のどこを指すのか、また、どういう意味なのか。また、「【『言語』において】サピア [ママ] が意図したところは、むしろ音声と音韻の区別の向こうにおける、言語の働きの闡明であったからである。このはたらきの実現として言語を見たとき、サピアはこれを「ことば」(speech) といっている」(p. VII) という文は『言語』のどこに記してあるのか。また、とりわけサピアが「話しことば (speech)」という用語をキーワードに採用し、書名に組み入れた説明になっていない<sup>3</sup>。

## §2. サピア『言語』の Preface と本文との対照表

『言語』の「まえがき」からの引用文を利用して全体構成を要約して表1にして示す。サピアの「まえがき」は、実は『言語』本体と密接に対応し、一文一文が名文とも称すべききわめつきの要約となっているのでサピアの「まえがき」に各章をテーマ別に織り込んで説明すれば『言語』の全体像を把握できると考えるからである。<sup>4</sup>

第1章、第2章では、およそ人間の言語には、実際に発話され具体的に観察可能な speech (話し言葉=パロール) と心理的、潜在的で直接観察することのできない language (言語の音素・文法の体系=ラング) の2層があることが示されている。

第3章では、言語音には音響的、物理的な表層の「音の体系」と心理的リアリティをなす深層の「音素の体系」という2層がある<sup>5</sup>。『言語』の第1章の冒頭第1段落 (Lg., p.3) は speech

3 サピア自身は、'by "speech" we shall henceforth mean the auditory system of speech symbolism, the flow of spoken words' 「『話し言葉』とは、以後、話し言葉が言語記号によって象徴化された聴覚による言語記号の体系、すなわち、発話された語のながれをさすものとする」と書いている。熟考を要する。Lg., p.24。本稿12頁参照。

4 筆者の知る限り、従来の訳書、解説書で「まえがき」に触れた論考はない。

5 (Lg. pp.56f.) ヤコブソン『一般言語学』川本茂雄監訳、みすず書房、pp.138f. Sapir, 'Sound patterns in language', 1925, 'The psychological reality of phonemes', 1933.

という日常語に始まり、第2段落 (Lg., p.4) は、language という単語が冒頭に用いられている。サピアの speech はソシュールの parole = パロールに相当し、サピアの language はソシュールの langue = ラングである。言語は speech (= パロール) と language (= ラング) の2層からなる。speech と language はサピア読解にきわめて重要な意味の違いがあるのではっきりと識別しておく必要がある。これら2つの語の違いは『言語』第1章で詳細に述べられている<sup>6</sup>。

表1 『言語』の全体構成 (Lg. は『言語』の原書を表す)

まえがき	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「話し言葉 (speech) の究極の心理的基礎」【『言語』の本文1, 2章に対応】</li> <li>・「言語の諸原理の記述【共時】性【本文4, 5, 6章】と通時性」【本文7, 8, 9章】</li> <li>・「言語の形態の多様性」【本文4, 5章】</li> <li>・「時間【駆流 (drift)】と言語」【本文7, 8, 9章】</li> <li>・【記号論】「言語の時間と空間における多様性 (人種, 文化, 歴史の2層構造)」【本文10章】【本稿§5】</li> <li>・【詩学】「言語と思考, 文化, 芸術」の2層構造【本文11章】【本稿§5】</li> <li>・「専門的な用語の回避」(本文全体)</li> </ul>	
【言語学の基本原理】	
第1章	序論—話し言葉の定義
第2章	話し言葉の要素 (ソシュールのパロールとラング: 表層と深層の2層構造)
第3章	言語の音声 (音と音素)「物理的, 音響的な音」と心理的リアリティをなす「音素」という表層面と深層面の2層構造。
【共時的原理】	
第4章	言語の形態—文法的過程 (言語の形態と意味との2層構造)
第5章	言語の形態—文法的概念 (同上)
第6章	言語構造の種類 (同上)
【通時的原理】	
第7章	歴史的所産としての言語: 駆流の2層構造 駆流1: 個別言語の駆流 (英語)
第8章	歴史的所産としての言語: 音韻法則 駆流2: 同族言語間の駆流 (英語とドイツ語) 駆流3: 人類の言語間に普遍的な「駆流」 (表層の駆流と深層の駆流の2層構造)
第9章	言語接触論 (印欧比較言語学における借用の見直し: 表層の借用と, 深層の借用 (実は駆流) の2層構造))【本稿§4】
【記号論と詩学】	
第10章	言語と人類と文化・歴史 (記号論: クローチェの2層構造)【本稿§5】
第11章	言語と文学 (詩学: クローチェの詩学=表層の詩と深層の詩の2層構造)【本稿§5】

6 その原典はソシュールの『講義』にある。三輪『ソシュールとサピアの言語思想』2014, 開拓社, 第1部参照。

また、「サピアの『言語』は平易で軽快である<sup>7</sup>」といわれることがあるがサピアの英語は決して平易ではない。逆に、言語学の専門家にはむしろ難解である。逆説的であるが、『言語』のむずかしさはサピアが「言語学界で用いられる専門用語 (...) はすべて避け」ている<sup>8</sup>ことが原因のひとつである。日常的な基本単語を使っているためにかえって意味を特定できず、理解できない。たとえば、formal, pattern, speech といった語は、言語学の専門書を読みなれた読者には、一見難解な morphological 「形態」<sup>9</sup>、system, structure 「体系・構造」、spoken language 「話し言葉」の方が意味を特定できてわかりやすい。訳語も「形式の」、「型」、「ことば」では意味を特定できずかえってわからない。特に「ことば」という訳語だけでは speech を用いたサピアの意図がわからない。

第7章では英語の「駆流」が論じられている。

第8章は冒頭の「言語の一般的な駆流は【英語という個別言語だけではなく】深みを有する。」(Lg., p.172) という書き出しからもうかがえるように個別言語である「英語の駆流より一層深層にある駆流」について論じられている。「駆流」<sup>10</sup>も2層構造をなす。

第9章の「言語接触」についてもサピアは「一見借用に見える現象も実は、借用ではなくその言語が祖語から受け継いできた「駆流」が原因となっている場合がある」という〔サピア第9章, Lg., p.201〕。サピアは「駆流」と「借用」についても、表層と深層の2層があることを指摘している。

特に、第10章と第11章の2章が『言語』に含まれている理由は「言語を理解するには従来の言語学者が研究対象として想定している言語よりもはるかに広い周辺、外辺におよぶ視野が不可欠である<sup>11</sup>」ということである。表層には言語間に顕著な違いがあるが、深層にある人類言語に普遍的な共通点が見いだされるまで視点を広げ掘り下げることが必要である。それが「記号論」と「詩学」の意味である。

以下、「まえがき」の冒頭から問題となる文言を引用して『言語』全体との関連でその意味を考える<sup>12</sup>。

### §3. 「まえがき “Preface”」を読み解く

サピア『言語』の意図はその「まえがき」に凝縮されている。サピアのきわめつきの「まえがき」はサピアの『言語』の主旨をわずか2頁足らずで語り尽くしている。「まえがき」を理解することが『言語』全体に一貫するサピアの言語観を理解することである。「まえがき」を熟読し、テーマ別に理解することができればサピアの全体像がみえてくる。

7 泉井久之助「サピアの『言語』」『月刊言語』1979, 2, p. 28.

8 Sapir, *Language*, “Preface”, p.vi.

9 サピアは印欧比較言語学を論じているので「形式」より「形態」のほうがなじむ。

10 サピアはメイエ (1925) の見解を人類の言語全体に普遍的な原理として確立した。Meillet, A. *La méthode comparative en linguistique historique*, 1925, Champion, p.48. 注19参照。

11 Lg. p.v. 本稿 §5, Saussure, *Cours de linguistique générale*, p.33, J. カラー『ソシュール』川本茂雄訳、岩波書店、pp.131f.

12 以下、§3で「まえがき」の全体を概観した後、第7、8、9章に関して「借用と駆流」 (§4各論その1) と、第10章、11章に関して「記号論と詩学」 (§5各論その2) について論じる。

テーマ1:「言語(=ラング)」に関する信頼できる視点を与える」

『言語(=ラング)」に関する事実を寄せ集めるよりも、むしろ、「言語(=ラング)」という主題についての確実な視点を与えることをめざしている』(“Preface”, p. v., ll. 1-3)

史的な印欧比較言語学も、南北アメリカ、アフリカ、アジアの先住民の言語の記述的研究も、諸言語のいろいろなデータは蓄積してきたが言語の本質論といえる深い考察は意外になされていない。そのことは『言語』を熟読して言語の本質に関するサピアの真意を理解すれば納得できる。

テーマ2:「話し言葉(speech)の究極の心理的基礎についてはふれない」

『話し言葉の究極の心理的基礎についてはほとんど触れるところがない』(“Preface”, p. v, ll. 3-4) (『言語』第1, 2, 3章に該当)

「話し言葉(speech)の心理的基礎」とは具体的に何を意味するのかは語られていない。語ることができないのである。「話し言葉(speech)」はソシュールの「パロール(parole)」である。文字に書き残された文献にもとづいて研究してきた19世紀の印欧比較言語学で言語学の基礎を学んだサピアが、アメリカでボアズ(F. Boas)と接触するに及んでアメリカ先住民の無文字社会の言語に接する。調査は先住民をインフォーマントとするフィールドワークしかない。無文字社会の調査には文献を資料とする印欧比較言語学の研究はまったく無力である。両者の資料と方法のあまりの違いにとまどうサピアが見いだしたのがソシュールの『講義』の「ラング論」である。そこには、文献を証拠とする研究も無文字社会の「話し言葉(parole=speech)」を証拠とする研究もともにspeechを研究の原点とする研究方法が提示されている。具体的にはソシュールがla circuit de la parole「パロールの循環」を言語研究の原点とし、それをサピアがthe cycle of speechと英訳して援用していることからあきらかである<sup>13</sup>。

テーマ3:「共時的にあるいは歴史的に」

『個別言語の具体的な事実を、あるいは共時的にあるいは歴史的に述べているにすぎない』(“Preface”, p. v., ll. 4-6) (『言語』第4, 5, 6章)

共時的な原理と事例は『言語』本文の4, 5, 6章、通時的な原理と事例は本文の7, 8, 9章に詳しく論じられている。

テーマ4:「言語は空間的にまた時間的にどのような多様性があるのか」

『本書の主たる目的は、私が「言語【ラング】」をどのようなものと考えているのか、言語は空間的にまた時間的にどのような多様性があるのか。また、他の人間が関心を抱く他の根本的な問題—思考の問題や歴史的過程、人種、文化、芸術の本質など—に対して言語はどのような関わりを持っているのか、をあきらかにすることにある』(“Preface”, p. v., ll. 6-10:『言語』10, 11章)

言語は空間的にと同時に時間的に展開するものである。言語はヨーロッパ世界だけに存在しているわけではない。地球全体のすみずみまで分布している。それらの言語のすべてが等しく人間の言語である。文字を持たないからといって歴史を持たないわけではない。サピアは文化、文明の原点である石器、火の発明の時点ですでに言語は存在していたという<sup>14</sup>。火の使用と石

13 三輪伸春『ソシュールとサピアの言語思想』2014、開拓社、pp.56f.

14 Lg., p.23.

器の作製の方法を子孫に伝え、文化とすることは言語を獲得してはじめて可能だからである。

テーマ5:「得られた展望は、言語学の専門家にとっても専門家ではない人々にとっても有益である」

『こうして得られた展望は、言語学の専門家にとっても専門家ではないが言語学に関心を持つ人々にとって有益である』(“Preface”, p. v., ll. 11-14) (『言語』第10, 11章)  
専門家はもちろん、およそ言語に関心を持つ人には、言語の真実の姿を見誤らないためにも一定の展望を持つことが不可欠である。

テーマ6:「文化記号論＝言語学は想定されている以上に言語学以外の分野と広汎な関係を持っている」

『言語研究の専門家もいちずに専門的な言語学にこりかたまった態度から解放されたいのなら言語学が想定されている以上に言語学以外の分野と広汎な関係を持っていることを忘れてはならない<sup>15)</sup>』(“Preface”, p. v., ll. 14-17) (『言語』第10章)

テーマ7:「言語と芸術＝言語学と芸術論(「美学 “Aesthetics”」)」

『クローチェは現代の著作家の中で、言語の根本意義を理解したごく少数のひとりである。彼は言語が芸術(美学)の問題と、密接な関係を持つことを指摘した。この洞察に関して、私はクローチェに深く負うところがある』(“Preface”, p. v., ll. 18-21) (『言語』第11章)

言語と芸術に関してサピアが例外的に名前をあげているのが、文化と詩学の2層構造を論じたクローチェである。

サピアは『言語』の中で言語学の文献については触れていない。もし、印欧比較言語学と南北アメリカ、アフリカ、アジアなどの無文字言語に関連する研究書をすべて列挙したら膨大な量になる。サピアはソシュール、メイエなどヨーロッパの言語学に関する文献や無文字社会の言語とその研究書は言語学界では周知のこととしてあげていない。言語学界ではなじみがないが、サピアに大きな影響を与え、名前をあげておく必要があるとみなされた重要な思想家が「まえがき」と第10章、11章で詳しく言及されているイタリアの思想家クローチェ(B. Croce)である。

テーマ8:「言語形態や歴史的過程の無意識的かつ理性確立以前の性質(「無意識」への示唆)」

『言語形態や歴史的過程は、それらに【言語学にとって】固有の興味とは別に、思考の心理、人間精神の営みのなかの不思議な、累積的な駆流(...)に関する、一段とむずかしく、とらえにくい問題のいくつかを理解するためには有効な価値を有している。この価値は、主として「言語構造【ラング】」の無意識的かつ理性確立以前の性質にかかっている』(“Preface”, p. v., ll. 23 vi . ll. 3)

サピアの『言語』が印欧比較言語学の批判を意図している<sup>16)</sup>ことを考えればformの「形式(安藤訳)」は「形態」と読んだ方が理解しやすいであろう。

15 もちろん、まず本人に「専門的な言語学に凝りかたまっている」という反省がなければならない。

16 最初の訳者木坂千秋が「過去の【歴史】言語学に対する鋭い批判が含まれている」(「訳者のことば」p.10)と記しているのは木坂の読みの深さを表している。なお、服部正己『ゲルマン古韻史の研究』1962、養徳社のサピア批判には大きな誤解がある。三輪伸春「サピア(E. Sapir)と服部正己『ゲルマン古韻史の研究』」2010、『龐大英文学』第19号参照。

「言語形態」と「歴史的過程」とは対比されている。したがって、この場合の「言語形態」とは「共時的な言語形態」である。この一文は「共時的な言語形態」を論じた『言語』の第4, 5, 6章の論点であり、「歴史的過程」とは第7, 8, 9章の論点である。

「言語の共時的形態の研究」と「歴史的過程の研究」は、それ自体の研究とは別に「思考の心理」, 「人間精神の営みの中に作用する不思議な、累積して行く駆流」に関して未解決の問題解決への有効な手段となる可能性がある。

印欧比較言語学は主に残された文字を証拠としているのでさかのぼるのはせいぜい5～6000年程度である<sup>17</sup>。ところが、サピアの『言語』の通時言語学を論じた第7章「歴史的所産としての言語」から第9章「言語の相互影響」では、言語現象というのは、印欧比較言語学が絶対的な方法とみなしている音韻法則、それに借用、類推という3つの方法は表面的な考察であって、言語の歴史の本質は扱いきれないという主張であることを心得ていないとサピアを理解したことにはならない。20世紀初頭には、言語の歴史といえば印欧比較言語学が絶対とみなされていたが、この場合に限らず、サピアはあらゆる側面において言語現象は表層的な研究だけでは不十分であり、より本質的な言語の深層面の考察が必要であると主張している。言語の2層構造への注意の喚起である。

言語のいろいろな側面を取りあげて、印欧比較言語学ではカバーできない範囲の広さと深さがあることに注意をうながしているのである。音声、形態と意味をつなぐ関係は従来考えられているほど単純ではなく、実は皆目見当もつかないほど奥深い難問である。将棋、碁の総体を「言語の体系」にたとえると、コマ（言語の要素＝音、形態）の種類と数はきわめて少数であるがひとつひとつのコマの一手一手によって連動する意味の可能性、多様性、変異の範囲は無限に近いので定式化することは容易ではない。日本語の詞と辞【欠如の場合も含めて】との組み合わせの多様性、共時性と通時性とは分離して考えるべきではないこと、ヨーロッパだけではなく、無文字社会の多い南北アメリカ、アフリカ、アジア、オーストラリアなども含めておよそすべての人類言語の全体に普遍的な視野にもとづく言語学であること、そして言語を媒材として用いる文学の意味（あるいは、芸術としてみた言語の本質を再検討すること、つまり詩学）など、サピアの視野は広大である。

#### §4. 各論その1:『言語』第9章について:「借用」と「駆流 (drift)」

サピアは「借用」についても、本書全編に一貫する「言語には表層と深層の2層がある」という考え方で説明している。

安藤訳の「解説」の430頁に「二つ以上の言語間に重要な形態上の類似がある場合、それは「拡散」として説明されるべきではなくて、もとは同族言語であった「痕跡」として説明されるべきである。」(下線筆者)は訳語が一貫していない。この文の後半は「それは【隣接する言語からの】借用として安易に説明されるべきではなく借用した側の言語みずからが祖語の時代から維持している駆流の発現として説明されるべきである」のほうが適切である。

この解説に対応する本文該当箇所は第9章の「言語接触論」にある(安藤訳, 344頁)。サピ

17 松本克己『世界言語の人称代名詞とその系譜』2010, 三省堂, は5万年さかのぼることが可能であることを証明している。



アは第9章で、わかりやすい表層の借用現象から複雑でわかりにくい深層の借用現象へと順次論を進めている。

借用のわかりやすい現象としては、まず第1に、世界の諸言語のなかで他の言語に大きな影響を与えたのは五つの言語だけである。古典中国語、サンスクリット語、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語である。第2に、「言語接触の影響は一方に強く傾くことが多い。文化の中心とみなされる言語は近隣の諸言語に相当な影響を及ぼす公算がはるかに大きい。中国語は韓国語、日本語、アンナン語の語彙に洪水のように入っていった。中世および近世のヨーロッパではフランス語が似たような影響を与えた。英語は、ノルマン人のフランス語から、後には中央フランス語から膨大な数の語を借用し、若干数の派生接尾辞をも譲り受けた。これらの影響はほとんど一方的であった」(Lg. 第9章冒頭の要約)。

一方、サピアは奥が深く気づきにくい現象として「一見借用に見える現象が実は、借用ではなくその言語が祖語から受け継いできた「駆流」が深層の原因である場合がある」と書いている(サピア第9章の本文。Lg., p.201)。従来の印欧比較言語学では、となりどうしの言語にみられるよく似た現象は安易に借用と考えられてきたが、実は、「借用ではなく、借用したとされる側の言語が祖語の時代から堅持してきた駆流によってもたらされた現象である可能性が大である」ということである。安藤訳の「たとえ、帯気しない閉鎖音のほうが古い音であり、古いゲルマン語の子音の変容がされないままの後裔だ、と想定するとしても、フランス語に隣接するオランダ語の諸方言が、ゲルマン語に一般的であったと思われる音声的偏流【<sup>マ</sup>】に従って、これらの子音を変容することを妨げられたのは、ことによれば、重要な歴史的事実ではないだろうか。」は晦渋である。「もしかりに、(オランダ語の諸方言の)帯気しない閉鎖音のほうが古い音であり、古いゲルマン語の子音の変容されないままの結果音だ、と想定した場合、フランス語に隣接しているオランダ語の諸方言が、ゲルマン語に一般的であり続けた音声的駆流によって、これらの子音が変化することを妨げられたのは【実はフランス語からの借用ではなくて】ことによれば重要な歴史的事実【駆流が原因】ではないだろうか。」と読むべきである<sup>18</sup>。

一見借用に見えるが実はより深層に流れる駆流が要因として作用していると思われる例が英語史にもみられる。フランス語からの借用語とされる英語の *choice* の出現である。

英語には不規則変化動詞と称される一連の語がある<sup>19</sup>。

不規則変化動詞から抜粋した下の表からはっきりわかる事実がある。

第1に、英文法では「不規則変化動詞」といわれているが印欧比較言語学では「強変化動詞 (strong verb)」<sup>20</sup>と称され、規則的な「母音交替 (アプラウト)」(Ablaut)<sup>21</sup>を形成する。

第2に、動詞の活用変化だけではなく、母音交替という語形成法が名詞にも及んでいる (drive: *drift*, choose: *choice*, speak: *speech*, bear: *birth*, sing: *song*)。

18 同族言語間の駆流に関してはメイエに研究がある。Meillet, A. *La méthode comparative en linguistique historique*, 1925, Champion, p.48. 泉井久之助訳『史的言語学における比較の方法』1977, pp.87f. みすず書房。しかし、より視野の広い一般的な原理として提言したのはサピアである。

19 アプラウトと英語の不規則変化動詞との関係については中島文雄「語源学解説」(中島・寺澤芳雄編『英語語源小辞典』1962, 研究社, pp.509f.) がすぐれた解説である。

20 「みずから屈折できるので強変化」、規則変化は「ほかの接辞 (-ed) の助力を必要とするので弱変化」という。

21 表中の語の下に記したような母音の交替によって文法機能の変化を表す。

	不定詞	過去	過去分詞	名詞
1.	drive [ai]	drove [ou]	driven [i]	drift [i]
2.	choose [u:]	chose [ou]	chosen [ou]	choice [oi]
3.	speak [i:]	spoke [ou]	spoken [ou]	speech [i:]
4.	bear [eə]	bore [o]	born (e) [o]	birth, burden, bier (死架) [ə], [ə], [i]
5.	sing [i]	sang [æ]	sung [ʌ]	song [o]

第3に、これら5語はすべて英語の基本語彙であり教育の普及もあり、今後新たに变化したり、廃用となることはないであろう。

第4に、表中の語はすべて非常に古い語である。印欧祖語にまでさかのぼる語ばかりである。

この表に見られるすべての語は英語本来語であり、印欧祖語より古く、文字出現以前から用いられてきた語である。長い歴史を持ち伝統的な語であるこれらの語の中から speech と drift がサピアの『言語』のキーワードとして採用されているのである。speech と drift をキーワードに用いているサピアの意図はどこにあるのか。サピアの見解は、英語という言葉にこめられたアングロ・サクソン民族の長い伝統にもとづく歴史と文化は、アングロ・サクソン民族がはるか遠い時代から日常生活において常に身につけて使いこなしてきた本来語でしか表現できない。英語あるいはアングロ・サクソン民族の歴史や文化を、ギリシャ語やラテン語に由来する新しいなじみのない専門用語や外来語では論じつくせない、ということである。

サピアの『言語』の全体を一貫する意図は、およそ人間の言語の全体像は19世紀以来の、ヨーロッパとアジアの一部だけを研究対象とし、しかも、文字言語だけを証拠に論じている印欧比較言語学では到底その全容をあきらかにできない。歴史文献はせいぜい5～6000年前からである。同じく人類の言語であるアジア、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアの諸言語も、無文字であるが同じ人類の言語であるから共通の研究法でなければならない。無文字の言語は文字として残された文献はないが印欧諸言語よりも長い歴史を持っている可能性がある<sup>22</sup>。そこで、文字を持たず、speech しか持たない諸民族の言語をも含めた言語学を提唱した。そのためには言語現象の原点である speech から検討を始めなければならない。それが『言語』におけるサピアの意図であり、speech がキーワードとして採用されている意味である。したがって、speech を「ことば」と訳しただけではサピアの意図はわからない。

サピアは英語の有史以前から重要な役割をはたしてきた語であることを心得て意図的に speech, drift をキーワードに選択し採用した。このことは、サピアがすぐれた詩人にみられる

22 言語の研究は文字に先立つ speech の時代を起点としなければならない。現生人類のホモ・サピエンスは、概略、20万年前にアフリカで誕生して、6万年前にアフリカを出立してヨーロッパ、アジアに展開していった。そして、氷河期の1万5000年前に海水面が下がって陸続きになったベーリング海峡を渡って北米大陸に到着し、その後1000年あまりで南米の最南端に到達し世界中に行き渡った。最近、日本の石垣島でフランスのラスコーやショウベ洞窟よりも古い壁画と手形が発見されている（白保人）。（年代の細部については異説がある）。

ようにひとつひとつの語をていねいに吟味し、その歴史的、文化的な由来、特徴、用法に細心の注意を払って選択したことを表している。『言語』が全体として一編の詩であり、言語芸術作品である理由のひとつである。サピアは「私は、言語学界で用いられている【一般の読者にはなじみのない学術的な】用語は大部分避けているし、専門的な術語は一切使用していない」(Lg., p.vi) といっている。このことはなにも言語学の専門用語、術語に限らない。『言語』の本文中にもギリシャ語やラテン語に由来する語、用語は極力避けられており、英語の基本的な日常単語が用いられている。実は、このことが『言語』を逆に読みにくく、むずかしくしている原因である。普通の言語学書と違って用語の意味の特定がむずかしいのである。

おそらくサピアの中で一番有名な語である drift は drive の名詞形<sup>23</sup>で drive-drove-driven-drift と母音交替をなす。アブラウトという現象そのものも印欧比較言語学では非常に重要な語形成要素である。サピアは、造語されてまもない専門用語ではなく英語という言語とアングロ・サクソン民族にとって文化的、歴史的に重要な意味を持つ基本単語をキーワードに用いたのである。speech, drift という語と、印欧諸言語にとって重要なアブラウトという言語現象によってサピアの視野の時間的な長さや空間的な広さを思い知らされる。

上の表の中で用いられている語はすべて英語本来語である (drive, choose, speak, bear, sing)。そして、これら 5 語の諸語形のうちで choose の名詞形 choice だけが唯一“外来語”とされてきた。choice は、1300年を初例として中期英語期にフランス語から借用された (ME chois < OF (F choix)) と考えられてきた。不規則動詞の屈折形に用いられている二重母音の母音交替はすべて本来語由来である。たとえば, [ai-ou]: abide-abode,; [ɛɪ-ou]: awake-awoke, stave-stove, wake-woke; [ai-au]: bind-bound, grind-ground, find-found<sup>24</sup>。これに反し, choice を形成する二重母音 [oi] だけはフランス語からの外来音であって英語本来語にはない音である<sup>25</sup>。

語と、語を形成する母音交替に見られる二重母音がすべて本来語由来である中であってただ 1 語だけ、外来の二重母音 [oi] を持つ借用語の choice が不規則変化の活用体系に組み込まれている根拠は何か。

choose-chose-chosen は本来語であり、印欧祖語の時代からアブラウト体系の一画をなしている。ただし、古期英語から、中期英語にかけてたまたま本来あるべき choose の名詞形が欠落していた。そこでフランス語の chois が英語の choose-chose-chosen と酷似した語形であったので借用された、という根拠は借用の表層面だけをみた考え方である。

借用語と「駆流」との関係で注目すべきことは、英語話者にとってフランス語の chois の音と形態は外来語とは感じられなかったことである。第 1 の根拠は、英語には本来二重母音を好む傾向 (駆流) がある<sup>26</sup>。第 2 に、古来よりアブラウト体系の一員として choose の名詞形として当然あるべき \*ʒ-V-s がたまたま欠落していた名詞の位置にフランス語 chois から伝統的な英語本来語の名詞形が復活されただけのことである。実は、フランス語 chois (<古フランス語 choix) はゲルマン祖語の時代にゲルマン語から俗ラテン語に借用された語である (俗ラテン

23 cf. thief-theft, give-gift, cleave-cleft.

24 [ɪ] の消失により新たに生じた二重母音 [iə, eə, uə] は除く。

25 noisome は方言由来の例外。boy の語源は不明。

26 cabaret, bouquet, née はフランス語の長母音から二重母音に手直して英語化された。

語\* *causire* cf. Goth. *kausjan*)。したがって、借用というよりはゲルマン語の「駆流」にしたがってアプラウトの体系を復活させたと考えることができる（フランス語からの借用というより逆輸入）。「駆流」はそれほど強い生命力を持つのである。従来の印欧比較言語学、英語史では、英語とフランス語という「となりどうしの言語にみられるよく似た現象なので借用された」と安易に考えられてきたが、実は、「借用ではなく借用したとされる側の英語が祖語の時代から堅持してきた駆流によって復元された可能性が大である」と考えることができる。結局、表層では借用のように思われる現象も深層まで追究してみると実は借用ではなく「駆流」が原因と考えられる場合がある。印欧比較言語学は表層面しかみていない<sup>27</sup>。

また、「駆流 (drift)」という視点（『言語』第7章）は、特定言語（英語）にだけ見られる歴史的特徴と理解されているが、英語だけではなく、同じゲルマン語系統のドイツ語にもみられることが『言語』の第8章に明記されている<sup>28</sup>。また、人類の言語に普遍的にみられる現象であることも明言されている（第8章, *Lg.*, p.186）。第9章の「言語接触」についてもサピアは「一見借用に見える現象も実は、借用ではなくその言語が祖語から受け継いできた「駆流」が原因である場合がある」と書いている（サピア第9章, *Lg.*, p.201）。したがって、サピアは「駆流」と「借用」についても、言語の歴史には表層と深層の2層があることに注意を喚起しているのである。

「表層面と深層面の2層構造」が一貫した原理であることを心得ていれば『言語』を読み解くことができる。

## §5 各論その2.『言語』の第10章「記号論」と第11章「詩学」

『言語』の第10章、第11章の章題はそれぞれ「言語と民族と文化 “Language, Race and Culture”」, 「言語と文学 “Language and Literature”」である。現今であればこのふたつの章は「記号論 “Semiology”」と「詩学 “Poetics”」と称すべき内容である。

*OED* の元版でも現行版でも *semiology* は重要語なので記載してある。が、初例はソシュールの『講義』（1916）から引用されておりフランス語 (*sémiologie*) のため〔 〕でくくってある。英語の初例はサピアより2年遅いオグデン&リチャーズ『意味の意味』（Ogden & Richards の *The Meaning of Meaning*, 1923）である<sup>29</sup>。サピアがその第10章、第11章で「記号論」と「詩学」を論じながら *semiology* という専門用語を用いなかったために *OED* にサピアからの引用はない。ソシュールが『講義』で言語研究には *semiology* が必要と初めて主張したことはよく知られている<sup>30</sup>。サピアは早くもその5年後（1921）に時代を先がけてソシュールの意図を正しく認識して第10章と第11章を「記号論」, 「詩学」として書いた。このことは、サピアがソシュール

27 中期英語期に創出された人称代名詞3人称単数形 *she* と、複数形の *they-their-them* の *th-* [ð] も北欧語からの借用ではなく英語の駆流が原因である可能性がある。

28 『言語』第8章冒頭「言語の一般的な駆流は【英語という個別言語だけではなく】深みを有する。」(*Lg.* p.172)

29 オグデン&リチャーズ『意味の意味』（1967, 新泉社）には、クローチェとサピアへの言及がある（石橋訳, pp. 67, 206, ほか）。なお、同書のp.305の「低い方の水準」, 「上の水準」は「深層の水準」, 「表層の水準」の意味。

30 Saussure, F. de *Cours de linguistique générale*, 1916, 1966, pp.97f.

ルの影響下にあることのアかしである。<sup>31</sup>

サピアが専門用語の使用を避けているために「言語学の書物なのになぜ「人種, 文化」, 「文学(詩学)」が論じられているのか」といぶかしく感じる向きも多いであろう。*OED*<sup>2</sup>から引用する。

### semiology

(...)

3.3 The branch of science concerned with the study of linguistic signs and symbols. Also in extended use.

[1916 F. DE SAUSSURE *Cours de Linguistique Générale* iii. 34 On peut donc concevoir une science qui étudie la vie des signes au sein de la vie sociale; elle formerait une partie de la psychologie sociale, et par conséquent de la psychologie générale; nous le nommerons sémiologie (du grec sēmeion ‘signe’).] 1923 OGDEN & RICHARDS *Meaning of Meaning* i. 8 The initial recognition of a general science of signs, ‘semiology’, of which linguistic would be a branch, was a very notable attempt in the right direction. 1932 W. L. GRAFF *Lang. & Languages* (...)

(*OED*<sup>2</sup>, semiology)

サピアが言語とは直接関係のない第10章「言語と人種と文化」と第11章「言語と文学」を『言語』に加えた論拠はイタリアの芸術哲学者クローチェ(B. Croce)の芸術論(美学)にもとづく。クローチェが人種と文化と文学(詩)における2層性を展開しているからである<sup>32</sup>。簡単に言えば、第10章「言語と人種と文化」は「人類には表層的には白人対有色人種などの違いがあるが、深層では同じ人類なので2層構造である。(...) イギリス人といえばアングロ・サクソン人を連想するが、実際には、北方ゲルマン人の他にノルマン・フランス人、スカンジナビア人、ケルト人(単一種ではない)、前ケルト人を含んでいる」ので単一民族ではない。安藤訳430頁の第10章の解説「『言語と人種と文化』では、言語、人種、文化上の類別は必ずしも一致しないし、人種と言語も対応するには及ばないし、文化の裂け目と言語の裂け目は同一ではない」という文は、「言語、人種、文化は表層面では異なっても深層面は同じという2層構造をなす」である。

サピアは、厳密には言語外の要因である人種と文化も2層構造で首尾一貫した説明をした。参考にした言語学書は周知のこととして記さなかった。クローチェは言語学の専門家にはなじみがないので例外的に名前と書名があげられている。

安藤訳の「訳者解説」(p.426)には、サピアの文学論が「凡百の文学論よりすぐれている」と書かれている。本文の該当箇所は第11章の382頁から389頁にある。ここに、サピアがクローチェの詩学(『美学“*Aesthetics*”』)から影響を受けた考え方、すなわち「芸術、言語における2層構造論」が展開されている。レヴィ・ストロースもサピアと類似したことを述べている<sup>33</sup>。

31 サピアの the cycle of speech (第1章) がソシュールの la circuit de la parole の英訳であることもサピアがソシュールの影響下にある証拠である。ソシュールは印欧語の(「喉音」laryngeal) 研究との関係で言語史研究は文字だけではなく、話し言葉(speech)の研究も不可欠であると考え、サピアは、ソシュールのラングーパロール論と自らのフィールドワークから文字ではなく話し言葉の研究が優先すると結論づけて書名も *Language: an Introduction to the Study of Speech* とした。三輪(2014)。

32 B. クローチェ『美学綱要』(細井雄介訳, 中央公論美術出版, 2008) pp. 42f., 51f., 151f.

33 レヴィ・ストロース「人種と文化」(『はるかなる視線Ⅰ』1986, みすず書房) pp.2-35, J. カラー『ソシュール』第4章「記号学」。

この部分は『言語』第11章「詩学」の核心をなす箇所である<sup>34</sup>。サピアはクローチェの2層の文化記号論と詩学により、『言語』の第1章から第11章までを首尾一貫した「2層構造」原理で全体構成を構築することに成功した。

「言語、文学、詩にはその民族にしかわからない固有の表層のレベル（スウィンバーンなど二流作家）がある」。他方、「人類言語に普遍的な深層は、個々の言語のレベルを突き破って人類の普遍的な人生、宇宙の真実を教える。」たとえば、シェイクスピア、芭蕉。文学、詩の芸術とは、表層では言語、文化の違いでそれぞれの言語、民族にしか理解できないような内容であるのに反し、深層に属する文学作品、詩は言語の違いを超えて理解することができる。言語が違っても伝えられる内容が全人類に普遍的な位相に芸術の深層がある<sup>35</sup>。

もっともすぐれた詩人たちは難解な用語ではなく日常基本語を最大限に活用する<sup>36</sup>。これが「サピアの文学観は凡百の文学論に勝る」の意味である。この信念に基づきサピアは日常基本語を最大限に活用することによって言語学概説『言語』を書いた。サピアの『言語』が最高の言語学書にして最高の詩、最高の言語芸術作品である理由はここにある。

「はじめに」からの次の引用文はサピアの見解を要約している。

言語研究の専門家がいちずに専門的な言語学にこりかたまつた態度から解放されたいのなら言語学が想定されている以上に言語学以外の分野と広汎な関係を持っていることを忘れてはならない。

（“Preface”, p. v., ll. 14-17）（『言語』第10章）

注：本稿では、サピアの『言語』の中から、第7章、第8章の「駆流」、第9章の「借用と駆流」、それに第10章と第11章の「記号論」と「詩学」についてのみ具体的に解説した。参考文献は本文中に記した。）

#### サピアの原典

Sapir, E. *Language: An Introduction to the Study of Speech*, (“Preface”, pp. iii- iv), 1921, N.Y., Harcourt; Brit. ed. London, Rupert-Davis, 1963, 1970 (“Preface”, pp. v- vi).

木坂千秋訳『サピア言語－ことばの研究序説』昭和18年、刀江書院。

泉井久之助訳『言語－ことばの研究』1957, 1967, 紀伊國屋書店。

安藤貞雄訳『言語－ことばの研究序説－』1998, 岩波書店。

#### 参考文献補遺

立川健二・山田広昭『現代言語論』1990, 新曜社。

三輪伸春『英語史への試み』1988, こびあん書房。

三輪伸春『ソシュールとサピアの言語思想』2014, 開拓社。

三輪伸春『新たな英語史研究をめざして』2018, 開拓社。

34 サピア, *Lg.*, p. 237, オグデン&リチャーズ『意味の意味』石橋幸太郎訳, p.305。サピアは日本の絵画（山水画、浮世絵）にも目配りをしていたことがうかがわれる（*Lg.*, p.4）。

35 サピア, *Lg.*, p. 238, note 4.

36 *Lg.*, p. 238f. 【安藤訳, pp.386～9】。